

図書室月報

2021年(令和3年)6月5日

第697号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

『性格とは何か』を受講して

稲毛 雄祐



公民館だよりを何気なくめくっていき、ふと目にとまったのがこのタイトルだった。このときの私にとって「性格」という言葉には不思議な引力があった。社会構造はめまぐるしく変化し、そのスピードは増す一方。その中で「不寛容社会」などという言葉に代表されるように、学校でも会社でも「こういうキャラクター、志向でなければいけない」という同調圧力のようなものがあふれているように（特に社会人になってからはなおさら）感じていた私は、ひよつとすると周りの目に敏感な自分の性格に、ある種生きづらさのようなものを感じていたのかもしれない。しかし、「性格」って何だろう、と改めて問われてみると漠然としてしまい、説明ができないことに気づいた。今回、大学を卒業して以来の学問的アプローチに久しぶりに触れ、あれは「良い」とかこれは「悪い」とか漠然と感じていた性格というものに対するイメージが論理的に言葉で説明されたことが大変新鮮に感じた。

そもそもなぜ性格にはバラエティーがあるのか、そんなこと考えたこともなかった。「馬が合う合わない」「みんな違ってみんな良い」「十人十色」などと言われるように、人々の性格は多様性に富んでいるわけだが、その個体差によって時に不和が起こることがあり、「何であんな考えをする人がいるのだろう」と感じた経験はきつと誰もががあるだろう。しかし、性格の多様性というのは、そのような個人レベルの話ではなく、たとえ環境が激変して淘汰が起きても「種そのもの」は存続し続けられるようにと環境や歴史的な変化の記憶で培われた言わば「究極の全体最適」であったと知り驚いた。

また、性格を言葉にするためにビッグ・ファイブ・パーソナリティという考え方もご教示頂いた。辞書を引き、人間の性格に関するであろうワードを集めて仲間分けした5大因子で、あのよく聞く「〇〇性」という言葉はそうやって生まれるのかと合点がいった。とはいえあくまでこれはベースの傾向であり、人の性格は多面的なものなので、「あの人は〇〇だから」と一つのものさしで周りの人を決めつけて見たいいけないと改めて思った。

更に、性格には国や地域による差も大きく出るところを知った。産業やその土地の文化が影響し、ある地域にある性格の人が集まると行動に特徴が出て、地域差が際立ちパーソナリティの集積が起きていく。この連鎖を利用して「〇〇のまち」などと特徴付けられ、町おこしや呼び込みにも使われるという。データから性格的傾向を把握することで、ある人々にしつくりくる居場所を提供することにもつながるというアプローチは大変興味深いものであったし、この視点を知っていると様々な人生の選択にも応用できるなど勉強になった。

生きづらさを感じるのは自分の性格の問題だ、そう考えることも多かった私だが、今回の講座を通して、性格とは社会の中で選択をする時の判断基準となるものだということを学んだ。それならば、自分に無いものを嘆いたり、無理に変えようとするのではなく、持っているものを大切に、自分に合った場所を探し続ける旅として人生をとらえた方がいいだろう。たった一度の人生を、より良いものにするために。

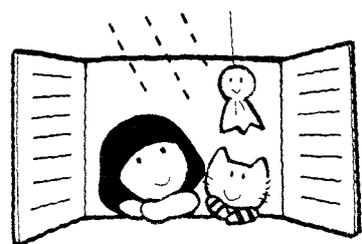
〈図書室のつどい 参加者の感想〉

多田多恵子 著

『美しき小さな雑草の花図鑑』

『身近な雑草の魅力』に参加して

吉村 佐恵子



子どもの頃、雑草は身近な存在だった。ペンペン草で音を鳴らしたり、オオバコを踏んで遊んだりした。大人になるにつれ、彼らとの接点はなくなっていくた。

フラワーアレンジメントを習い、「綺麗な花」を愛でながら作品づくりに熱中していた。そんな私が今回、「雑草」というフレーズが気になり参加をした。遠出が難しい状況で、近所を散歩することが多くなったからこそ、この言葉が目に残ったのだろう。

多田先生は、実際に触れてみようということでもいくつかの雑草を持ってきてくれた。その中に厚みのある葉っぱがあった。透かしてみると無数の穴が見えた。先生が表現するように満点の星空のようできれいだった。ちぎってみると柑橘系のいい香りがしてきた。この穴は、香り

成分の貯蔵庫であるという。子どもの頃の授業では、植物については「光十二酸化炭素+水+光合成」という図式を教わっただけだった。実際に触れてみて、五感を使って植物の魅力を感じることが、想像以上に私をワクワクさせた。暗記したり、遠くから眺めるだけではできない貴重な体験だ。

またススキなどのイネ科の雑草は、外敵から身を守るためにガラスを葉のフチにつけている。小さな名も知らない雑草たちも、自らガラスを作り出す力を持っていることも衝撃的だった。彼らは生存していくために、知恵を絞って工夫して精一杯生きている。植物は動けないことなどから、人間よりも弱いと思っていた私は彼らのたくましさ、力強さを感じた。さらに彼らは、子孫を残すために趣向を

凝らしている。花粉を虫や鳥たちに運んでもらうために、客である彼らに宣伝、アピール活動も怠らない。タンポポのように、上向きで目立つ構造のため、虫が蜜を吸いやすく、誰でもウエルカムなファミレスのような花や、客を選ぶ下向きに咲く花もある。偽物で騙して、おびき寄せるツワモノもいる。

人間の私は、どう策を練って生きていくのか考えてみた。浮かんでは『交渉力』だ。日々、家族などの身近な人や付き合いの浅い人など様々な人と関わる中で大切な力だと思ふ。こうしてほしいと思ったり、お願いされたりとどちらの立場にもなる。それがあれば幾分、心がラクに過ごせるだろう。距離感や話の仕方を工夫したり、きっぱりNOと伝えることも必要だ。時には、フェードアウト

したり、ものはいよいよ的なスタンスで、わき道を歩いたりして日々上手に暮らしていきたい。そして、たまには立ち止まってぼんやりする時間もいい。情報が溢れ、頭がゴチャゴチャになる今、大切なだと思ふ。

先生は、雑草はこちらから近づいていくことで、小さくて見逃してきた彼らの存在に気づくと教えてくれた。時折、彼らにまなざしを向けるようになった。「この草何?」と一時その世界に入れて、頭がぼんやりできて心地よい。そんな瞬間が雑草と触れるスタートでもある。お気に入りの場所、シートを広げて、ごろりと横になることが前から好きだった。今まで知らなかった小さな世界をのぞけるかもしれない。ちよつとワクワクしてきた。

■■■■■■■■■■ 新着図書から ■■■■■■■■■■

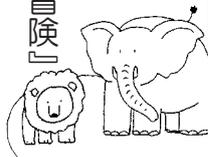
〈哲学 心理学 宗教〉
 手の倫理 伊藤亜紗(講談社) 141
 〈歴史〉
 クレア・バーチンガー自伝クレア・バーチンガー(潮出版社) 289
 植民地台湾を語るということ 胎中千鶴(風響社) 289
 ルース・ベイダー・ギンズバーグ ジェフ・ブラックウエル・編(あすなる書房) 289
 街なか東京山さんぼ
 『江戸楽』編集部(メイツユニバーサルコンテンツ) 291
 〈社会科学〉
 ドイツの学校にはなぜ「部活」がないのか 高松平蔵(晃洋書房) 302
 ローザ・ルクセンブルク 姫岡とし子(山川出版社) 309
 現代民主主義思想と歴史 権左武志(講談社) 311
 ロッキード疑獄 春名幹男(KADOKAWA) 312
 ルワンダの今 片山夏紀(風響社) 316
 選挙はまちづくり 松下啓一・編著(イマジン出版) 318
 反日韓国という幻想 澤田克己(毎日新聞出版) 319
 月経と犯罪 田中ひかる(平凡社) 326
 袴田事件の謎 浜田寿美男(岩波書店) 326
 都市に聴け 町村敬志(有斐閣) 361
 日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション デラルド・ウイン・スー(明石書店) 361
 ルポルタージュイスラムに生まれて 読売新聞中東特派員(ミネルヴァ書房) 367
 女性差別はどう作られてきたか 中村敏子(集英社) 367
 さよなら、男社会 尹雄大(亜紀書房) 367
 誰かの理想を生きたらほしくない 吉野収(青土社) 367
 「えのき」の親の30年 えのき会(ウインかもがわ) 369
 仮設住宅その10年 宮城孝(御茶の水書房) 369

シヤオハイの満洲 江成常夫(論創社) 369
 社会に届け、沈黙の声 柴田保之(萬書房) 369
 にほんでいきる 毎日新聞取材班(明石書店) 371
 境界線の学校史 木村元(東京大学出版会) 372
 「ちがいが」がある子とその親の物語 アンドリユー・ソロモン(海と月社) 378
 リターンズ ジェイムズ・クリフオード(みすず書房) 389
 〈自然科学〉
 科学とはなにか 佐倉統(講談社) 404
 ちゃんと知りたい! 新型コロナの科学 出村政彬(日経サイエンス) 493
 認知症かもしれない家族のためにできること 千葉京子・編(弘文堂) 493
 医師が死を語るとき ヘンリー・マーシュ(みすず書房) 494
 日本のコロナ対策はなぜ迷走するのか 上昌広(毎日新聞出版) 498
 本当は危ない国産食品 奥野修司(新潮社) 498
 〈工業〉
 水都東京 陣内秀信(筑摩書房) 518
 環境倫理学のすすめ 加藤尚武(丸善出版) 519
 76億人が暮らす「一軒家」 末吉正三(新評論) 519
 モビリティ・エコノミクス 深尾三四郎(日経BP日本経済新聞出版本部) 537
 〈産業〉
 地域公共交通の統合的政策 宇都宮浄人(東洋経済新報) 681
 〈芸術〉
 ベートーヴェン一曲一生 新保祐司(藤原書店) 762
 〈文学〉
 八月の銀の雪 伊与原新(新潮社) 91
 NHKラジオ深夜便文豪通信 中川越(河出書房新社) 91
 文豪たちの西洋美術 谷川渥(河出書房新社) 91
 隣の国のことばですもの 金智英(筑摩書房) 91
 死にたいけどトポツキは食べたい・2 ペクセヒ(光文社) 92

動物園の歴史は生物の進化をほうふつとさせる。オリ中心の展示↓パノラマ展示↓ランドスケープ・イマージョンというふうには、飼育施設の変化はかならずしも一直線で結ばれるものではない。じつさいには、異なる展示は長きにわたって並存する。無数にある類似施設は、ニッチ(オリジナリティを発揮できる場所)を求めて日々少しずつ変化しているのだ。そのなかで、新しい時代にマッチした変異体Ⅱ従来の価値観からすればヘンタイ性の高い施設が登場して、それが他をおしのけて主流となっていく。動物園の存亡は、とどのつまり、このニッチを探しもとめて越境する精神を失ってしまいか否かにかかっている。

もちろん本書であつかうのは、こうした話題だけではない。ひとと動物をめぐる生々しい事件もふんだんに紹介している。とくに戦時中の動物園にまつわる数々のエピソードは、新型コロナウイルスのパンデミックを経験した2020年現在、不気味なリアリティをもってよみがえってくる。

(中公新書)

〈一節〉
 溝井裕一著
 『動物園・その歴史と冒険』


図書室のしごと

和歌と暮らした日本人

恋にも仕事にも日常にも、

和歌は大活躍！

お話 浅田 徹(お茶の水女子大学)

日本人に古くから愛されてきた和歌。有名な歌を除いて、何のために詠まれたのかということは意外と知られていません。時にラブレターとして、時にお祝いやお悔やみとして、時に仕事の愚痴を吐き出す手段として、多様な場面で和歌は活躍していました。

「和歌には百人一首でしか触れたことがない……」という方も大丈夫！今回は、日本人の日常に寄り添いながら親しまれてきた和歌の知られざる一面を、分かりやすくお話しいたします。

〈浅田さんの本〉『恋も仕事も日常も 和歌と暮らした日本人』(淡交社)、『百首歌 祈りと象徴』(臨川書店)ほか多数

とき 6月26日(土)

朝10時〜12時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込先 6月8日(火)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141



*発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。また、マスクの着用をお願いします。

〈私の本棚から 第3回〉

岩井俊二著

『ラブレター』

上野 千晴



私はこの本の装丁が好きだ。ザラツとした紙の質感。ちらつく白い雪の粒。一匹のトンボと銀の文字タイトル。書店の棚から滑り出した本の表紙は、静かで美しく、とても印象的で心惹かれたものだった。

寒い雪の季節のお話。藤井樹が雪山で遭難したのは二年前のこと。残された恋人の博子は、樹の三回忌の日に、彼の中学時代の卒業アルバムを初めて目にする。神戸に越す前に住んでいた小樽の中学校。自分の知らない樹の思い出に触れた博子は、あることを思いつく。名簿のページで見つけた、今はもう国道になってしまっているという当時の住所に、彼に宛てて手紙を出すことにしたのだ。何処にも届くはずのない手紙を。

拝啓、藤井樹様。

お元気ですか？私は元気です。

渡辺博子

藤井樹の処に、へんてこな手紙が届いた。差出人は、神戸の渡辺博子。小樽に住む彼女には、全く身に覚えのない名前だった。けれども、ほんの悪戯な気持ちで、樹はその手紙に返事を出した。

返ってくるはずのない手紙に、返事が来た。差出人は、藤井樹。悪戯か？奇跡か？博子は、この不思議な手紙が彼からの物だと信じたくて、また手紙を出すことになる。こうして、神戸の博子と小樽の樹の、奇妙な文通が成立していくことになる。からくりを書いてしまうと、これは同姓同名が生み出した偶然の出来事。同じ中学の同

じクラスに、藤井樹という男女がいたことで起きた奇跡。幾つかの悪戯心に導かれ、過去と今が思いがけず繋がっていく。博子と樹と樹。こんがらがった関係と、思い出に隠された真実は、時を超えて彼女たちに届いてゆく。名前という悪戯を通して。

あれこれと、思い出を遡るにつれて真実が見えてくると、タイトルの本当の意味が分かってくる。誰も借りていない本のカードに書く名前(分かる！まささらなカードの最初に名前を書く特別感、本好きの人には誰しも覚えがある感覚だろう)。樹の眠るお山に木霊する博子の声。口ずさむ『青い珊瑚礁』庭に生えている一本の木。それぞれが全て、誰かを密かに想う、手紙ではないラブレターなのだという事に気づかされる。

この本は何故か、読み終わってすぐにまた読み返したくなる本だ。手紙と名前と図書カード。物語が始まらない訳がない。最後の最後に届く『失われた時を求めて』が何とも憎い。祖父が言う「こういうことは人知れずやるから意味があるんだ。」という言葉も、可笑しくて仕様が。まったく、素直じゃないってややこしい。

(角川書店)

くにたちブッククラブ

一人生、野を越え山こえて一

柳美里

『JR 上野駅公園口』

(河出文庫)

講師 山岸郁子

(日本大学・日本近代文学)

とき 6月24日(木)
夜7時半〜9時半

ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は7月8日(木)

高橋弘希『指の骨』

(新潮文庫)です。

